

看護学生にOSCEを実施し ての評価

茨城県立医療大学 保健医療学部 看護学科

○市村久美子 浅川和美 小室佳文 富田美加
黒木淳子 加納尚美 前田和子

金子昌子

梶原祥子

池田智子

研究目的

本学では、学生の能動的学習姿勢を育み、臨床実践能力を高めるために、領域横断的に技術項目を抽出し、看護学科一丸となってOSCEに取り組んだ。今回、学生の反応からみたOSCEの有効性と今後の課題を明らかにする。

研究方法

年月日：平成17年2月8日

対象：看護学科3年生48名

内容：OSCE実施直後に学生にアンケート調査を実施した。調査内容は、実施項目の難易度やフィードバックの有効性、自己の課題などであった。

臨地実習とOSCE実施時期

1 年 次	試験期間 2/6～2/10		2/20
	試験期間	看護体 験実習	まとめ

2 年 次	後 期		
	第16週 9/19～9/23	第17～28週 9/26～12/16	試験期間 2/6～2/10
	オリエンテー ション	基礎看護実習	試験期間

3 年 次	後 期		
	第16～17週 9/19～9/23	第18～30週 9/19～1/13	試験期間 2/6～2/10
	オリエンテー ション	急性期看護実習 慢性・終末期実習 精神看護実習 周産期看護実習	試験期間

↑
実習前OSCE

↑
平成16年度OSCE

前 期		後 期		
第1～2週 4/4～4/8	第3～15週 4/18～7/22	試験期間 7/25～7/29	8/1～9/9	第16～30週 9/12～9/16 9/19～1/13
オリエン テーショ ン	リハビリ看護実習 在宅看護実習 地域看護実習	試験期間	助産継続 実習	課題別 実習
				第21～25週 助産実習

↑
実習後OSCE

OSCE課題内容の構造化

課 題	ライフサイクル				看 護 技 術					
	周産期	小児	成人	老年	フィジカルアセスメント	コミュニケーション (倫理面を含む)	安全 (感染予防・ボディーメカニクス・固定)	教育・指導	日常生活援助	診療援助
小児の点滴管理		○					○			△
子宮底長測定	○				○					△
呼吸音聴取				○	○			△		
片麻痺患者の車椅子移乗			○				○	△	△	
初対面の患者への対応			○			○				

(○:主な評価視点 △:従となる評価視点)

OSCEの準備および具体的方法

- 看護学科の全教員および附属病院の病棟師長が参加して課題および評価表の作成を行った。
- 5つの課題を2ルート10ステーションで実施した。
- 1課題の所要時間は7分とした(実施5分・フィードバック1分・移動1分)。
- 各ステーションは独立した個室である演習室で実施した。
- 評価者は看護学科教員とし、課題の担当領域外の教員も評価者として加わった。
- 1ステーションに2人の評価者を配置した
- 学生へのフィードバックは、試験終了直後1分間で、必ず、良かった点を伝え、助言した
- 評価は、マニュアルに沿って評価し、点数化した。2人の教員の平均点を各課題の点数とした。
- 5つの課題の点数の総合点を、学生の実践能力として60%以上得点した人を合格とした。

タイムスケジュールとOSCE課題

8 : 40	学生集合	
8 : 45～8 : 55	オリエンテーション	
9 : 00～9 : 35	1クール目 学生1番～10番実施	5分休憩
9 : 40～10 : 15	2クール目 学生11番～20番実施	10分休憩
10 : 20～10 : 55	3クール目 学生21番～30番実施	5分休憩
11 : 05～11 : 40	4クール目 学生31番～40番実施	10分休憩
11 : 45～12 : 20	5クール目 学生41番～50番実施	

OSCE課題（5項目）

A.小児の点滴管理

B.子宮底長測定

C.呼吸音聴取

D.片麻痺患者の車椅子移乗

E.患者との初回面談

表 1グループ目のまわり方

課 題	Line 1					Line 2				
	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
9 : 00～9 : 07	学生1	2	3	4	5	学生6	7	8	9	10
9 : 07～9 : 14	5	1	2	3	4	10	6	7	8	9
9 : 14～9 : 21	4	5	1	2	3	9	10	6	7	8
9 : 21～9 : 28	3	4	5	1	2	8	9	10	6	7
9 : 28～9 : 35	2	3	4	5	1	7	8	9	10	6

OSCE実施状況



ステーションの前で待機

鐘の音を合図にステーションに入室



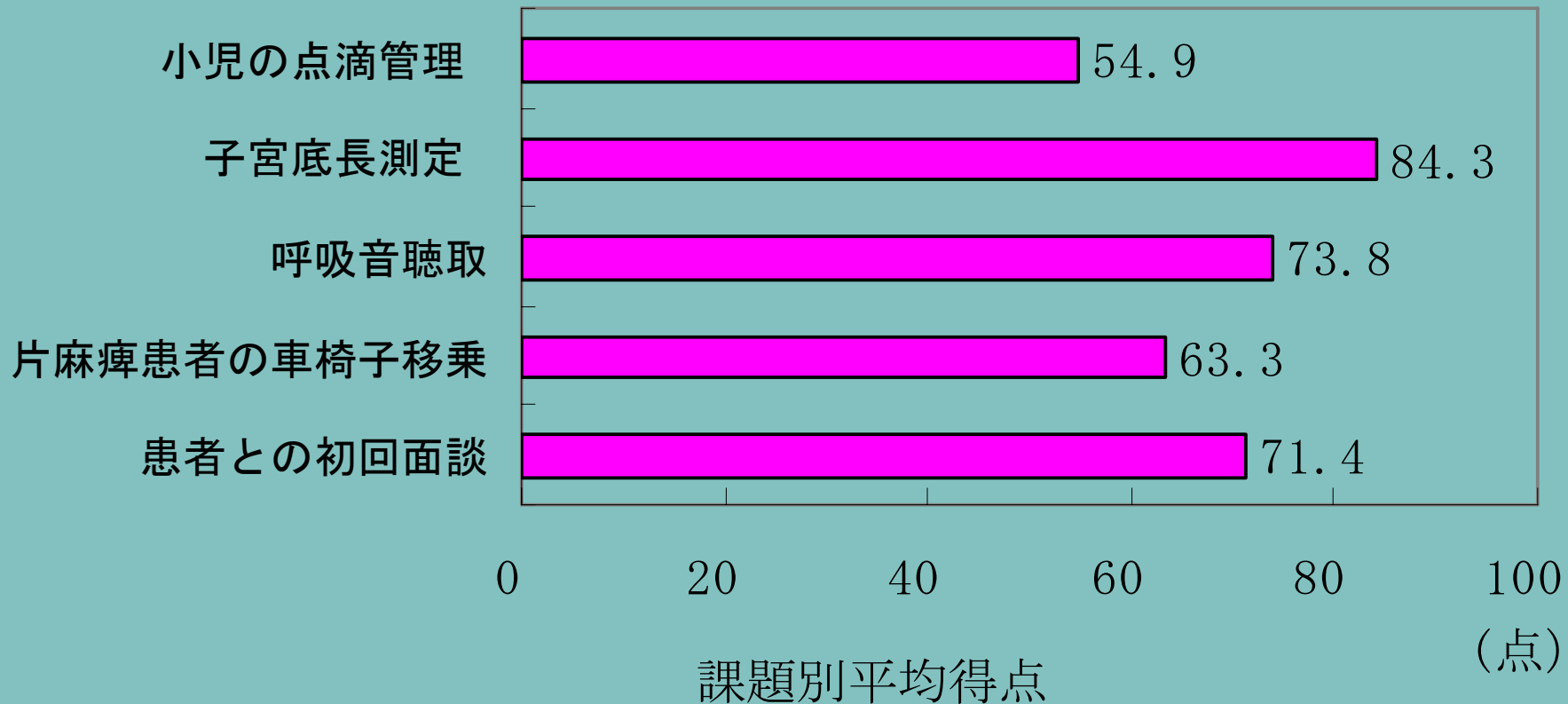
ステーション内の様子

課題C 呼吸音聴取

課題A 小児の点 滴管理



結 果



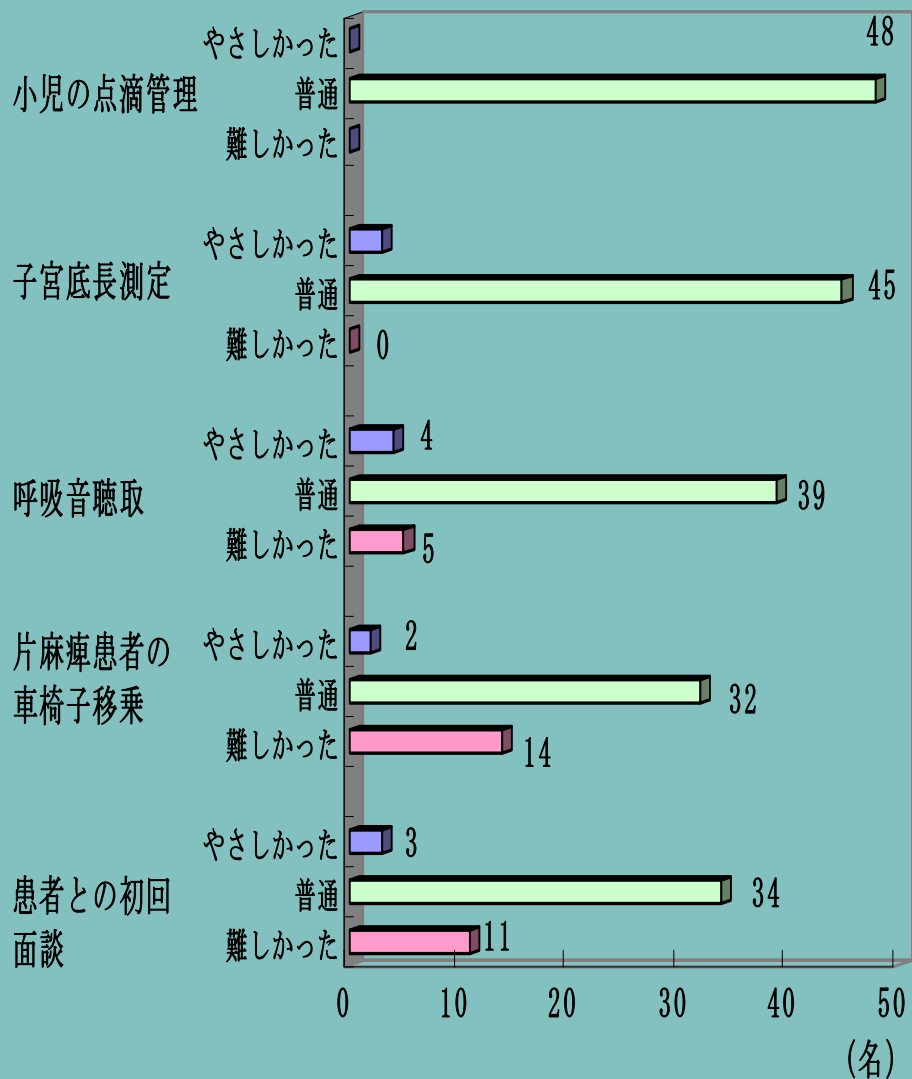


図1 課題の難易度に関する学生の反応

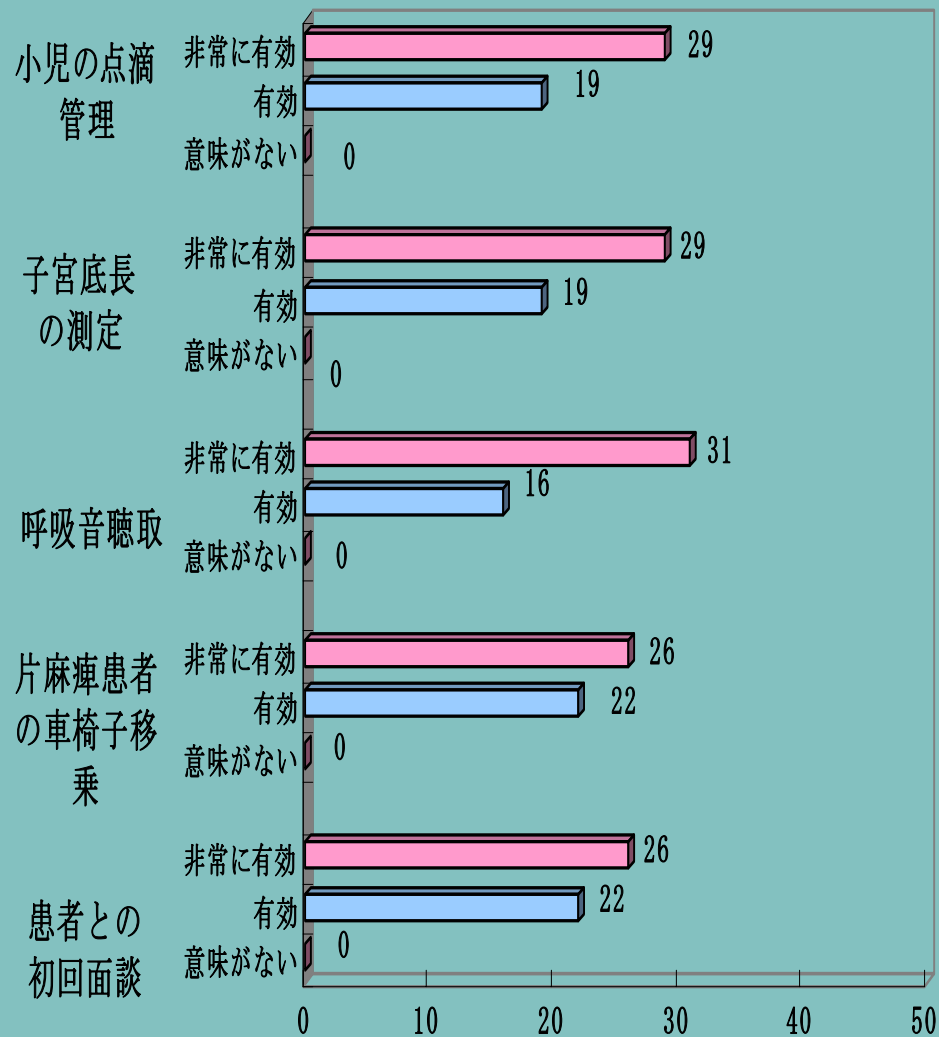


図2 フィードバックに関する学生の反応 (名)

今後の課題について

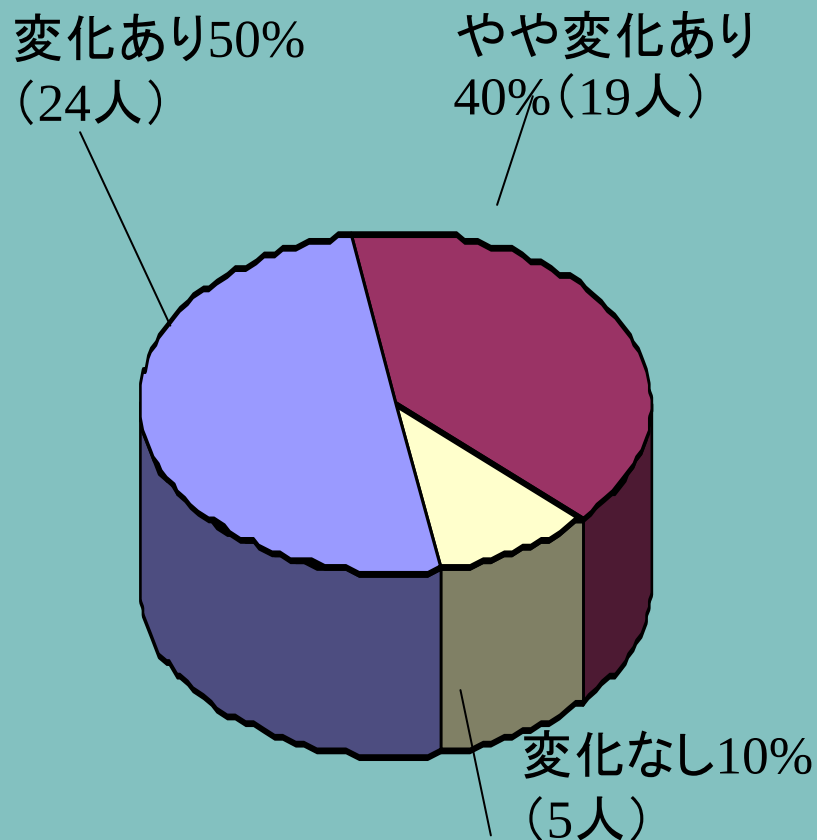


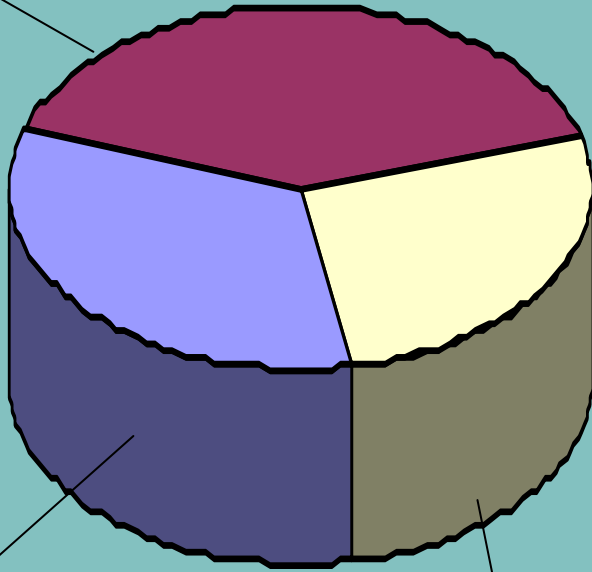
図3 今後の課題についての学生の反
応

<自由記述内容>

1. 自己の学習課題が明確になった。22名 (43.1%)
2. 知識と技術を統合させた学習が必要。6名 (11.8%)
3. 知識・技術の再学習が必要。6名 (11.8%)
4. その他5名 (9.3%)
 - ・客観的にみてもらうことができたので、自己判断だけではなく、正確な技術かどうか理解できた。

臨地実習に向けての意欲の変化

やや変化あり40%
(18人)



変化あり33%
(15人)

変化なし27%
(12人)

<自由記述内容>

意欲の高まり 28名(56%)

- ・実習に対する意欲が高まった
- ・学習の取り組みを積極的にしたい

い

・知識・技術の再学習への意欲が高まった

不安の表出 3名(6%)

- ・4年次の実習への不安が募った

- ・実習や就職への不安が増強した

た

図4 臨地実習に向けた意欲の変化に関する学生の反応

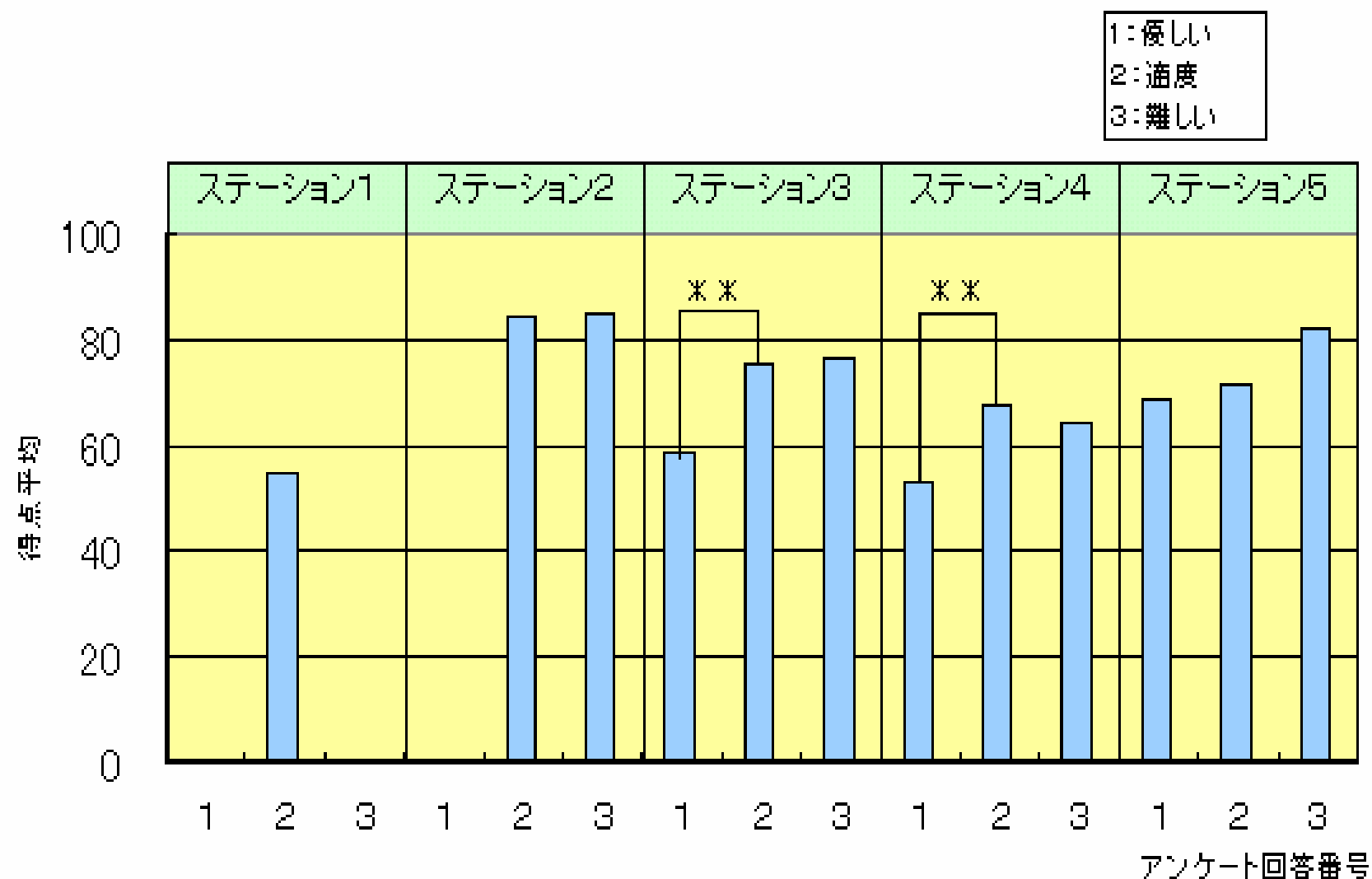


図5 学生の難易度回答別 OSCE得点の平均 **P<0.01

考察

OSCE実施後の学生の反応を調査した結果、以下のことが明らかになった。

1. 66%から100%の学生が、OSCE項目の難易度は「適切（普通）であった」と答えた。課題により学生が感じる難易度と評価者の得点に差がみられ、フィードバック内容の検討の必要性が明らかになった。
2. 90%の学生は「今後の自己の課題に関する考えに変化があった」と答えており、その内容は、「特定の領域や課題の内容にとどまらず、知識と技術を統合させた学習が必要」「知識・技術の再学習が必要」など学習全般にかかわるものであった。
3. OSCEにより「実習への意欲が高まった」のは56%、反対に「実習や就職への不安が増強した」のが6%であり、今回の実習途中のOSCEの実施が影響していると考えられた。